

「教育臨床総合研究 8 2009研究」

中学校音楽科における領域横断型カリキュラム開発

The Development of a Cross-Field Curriculum
for the Junior High-school Music Department

河 添 達 也*

Tatsuya KAWASOI

多 賀 秀 紀**

Hidenori TAGA

要 旨

島根大学大学院教育学研究科は平成20年度に改組を行い、新しい教育課程をスタートさせた。本研究は、大学院教育学研究科の開設科目である「教科内容構成実践研究」の一環として設定したものであり、中等音楽科教育における領域横断型カリキュラム開発の可能性を追求し、それらのもつ諸課題を明らかにしたものである。

キーワード

音楽科教育、領域横断型カリキュラム、学習指導要領、知覚・感受、共通事項

I はじめに

我が国の中学校及び高等学校における音楽科教育は、「A表現」（以下、表現）、「B鑑賞」（以下、鑑賞）の2つの内容で構成されている。さらに、表現は、「歌唱」、「器楽」、「創作」の3つの分野に分けられており、鑑賞とあわせた4つの活動が授業展開の軸となる。平成20年3月に告示された中学校学習指導要領（以下、学習指導要領）の、第3「指導計画作の作成と内容の取り扱い」の（2）では、「第2の各学年の内容の「A表現」の（1），（2），（3）及び「B鑑賞」の（1）の指導においては、それぞれ特定の活動のみに偏らないようにすること。」¹⁾とされている。併せて出版された中学校学習指導要領解説（以下、学習指導要領解説）の第4章の1「指導計画作成上の配慮事項」の（2）には、上述の学習指導要領の内容の解説として、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、生徒の興味・関心を引き出し、学習への意欲を喚起することが大切である」²⁾と記され、「歌唱や鑑賞のみに偏ったり、歌唱の指導について合唱活動に偏ったり鑑賞の指導について特定の曲種に偏ったりすることのないように留意して、年間指導計画を作成しなければならない」³⁾ともされている。しかし、今回の学習指導要領改訂に際して、音楽科の授業時間数増加は見送られ、小学校・中学校の音楽科を含むいくつかの教科を選択にするという意見が出ていること⁴⁾からも、音楽科をとりまく環境は厳しさを増し

*島根大学教育学部芸術表現教育講座

**島根大学大学院教育学研究科

ていることがわかる。このような状況下にあつて、各活動を関連させた領域横断型の授業展開は今後さらに重要性を増すであろう。

II 研究目的と方法

1 研究目的

本研究は、以上の研究仮説をもとに、中等音楽科教育における領域横断型カリキュラム開発の可能性を、中学校音楽科に特化した上で追求することを目的としている。加えて、限られた授業時間数内で4つの活動（「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」）を密接に関連させ、生徒が既存の枠を超えて活動することができる教材を選択するための指針を策定し、その諸課題を明らかにする。

2 研究方法

本研究では、フィールドワークと文献・資料学的方法の二側面からアプローチを試みた。

第一に、附属中学校（以下、附中）でおこなった授業観察の概要を示す（表1）。

表1

調査期間	2008年9月上旬～2009年2月上旬
調査対象	島根大学教育学部附属中学校の生徒
調査時間数	10時間
調査目的	①教材に対する生徒の興味・関心、学習意欲を把握すること。 ②表現（歌唱、器楽、創作）と鑑賞の関連を確認すること。

また、授業観察に関連して附中音楽科の年間指導計画を分析し、授業の展開状況を確認する。

第二に、領域横断型カリキュラム開発や授業展開に関する先行研究や実践例、文献を収集し、明らかにされている成果や課題を整理する。本研究の目的である領域横断型カリキュラム開発については、他教科との関連を図った先行研究や文献⁵⁾も存在するが、ここでは音楽科における4つの活動に限って研究を進めることにする。

そして、まとめと考察としての学習指導案モデル（以下、指導案モデル）を提示する。これは、本研究の目的に加えて、平成20年3月に告示された、新しい学習指導要領（以下同様に、学習指導要領）の内容を踏まえたものとし、各活動のスムーズな連結や、教材選択の指針も併せて提示する。

III 研究成果

1 授業計画及び年間指導計画の分析

附中における授業観察と、年間指導計画を分析した結果、明らかになった内容は以下の通りである（表2）。

表 2

	明らかになった内容
授業観察から	①歌唱活動に対する関心が高い。 ②特に、混声合唱に対する関心・意欲は非常に高い。 ③旋律聴音と記譜の能力を、高いレベルで身につけている。
年間指導計画から	④器楽や創作に関する指導事項を主たる指導事項に設定した題材が歌唱に比べて少ない。 ⑤鑑賞に関する指導事項を設定した題材は、表現に関する題材とは別に展開されている。

①については、平成20年11月に行われた、「島根大学教育学部附属学校園 第1回 幼小中一貫教育研究発表協議会」における配布資料及び分科会において、附中の音楽科は歌唱指導を重視しているという研究報告がなされたことから裏づけることができる。②及び③は授業観察の結果から、④及び⑤については年間指導計画からそれぞれ明らかになった。

また、④に関して、主たる指導事項を2ポイント、副次的な指導内容を1ポイントとして、活動ごとの指導事項の偏りを指数化する方法⁶⁾で分析をおこなった(表3)。

表 3

	歌 唱	器 楽	創 作	鑑 賞
第 1 学 年	23	20	1	14
第 2 学 年	37	7	2	13
第 3 学 年	32	7	2	10

表3からも附中は歌唱指導を重視していることが分かる。一方、各活動間に指数の不均衡が見られるが、このことが及ぼす影響や問題についての考察は本研究の目的と合致しないため、ここではおこなわない。

2 先行研究等の分析

先行研究や実践例、文献は、以下の2つの視点のうちいずれかに合致するものを収集した。

①表現と鑑賞にまたがる授業展開を企図した先行研究または実践例

②学習指導要領に盛り込まれた〔共通事項〕についての記述がある文献

①については、本研究の目的に大きく関連するものであり、成果や課題を整理する必要性から収集の対象とした。高月(2007)は、アジア音楽を教材として、表現と鑑賞の関連を図った授業展開を企図した。その中で、表現及び鑑賞の指導事項を4つの側面(構造的側面、感性的側面、技能的側面、文化的側面)に整理したうえで指導内容を明らかにし、表現と鑑賞の指導事項の共通性(楽器の音色、曲想、奏法)を見出した。さらに授業実践を踏まえて、「共通の指導内容を設定することにより、別々に学習するより短時間で複数の指導事項を取り扱うことが可能となり、効果的な学習展開ができた」⁷⁾と結論づけている。ただし、高月の研究は表現における器楽と鑑賞の関連を図ったものであり、歌唱や創作に関連させるための方法について

は明らかになっていない。

②については、学習指導要領の内容を踏まえた指導案モデルの作成を試みる上で不可避な検討事項であると考え収集の対象とした。このことについては、学習指導要領解説に次の記述がある。

キ 「共通事項」の新設

音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る能力を「共通事項」として新たに示した。この「共通事項」は、表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が行われるよう工夫することとした。⁸⁾

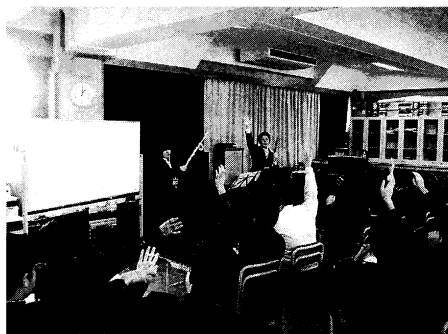
また、西園と伊野(2008)は、「共通事項」を、「音や音楽を知覚し、感性を働かせてその特質や雰囲気を感じ取る能力が音楽活動を支えているという考えによるもの」⁹⁾であるとしている。つまり、この「共通事項」は新学習指導要領における音楽科の目標に示された「音楽活動の基礎的な能力」を育成する上で、重要な意味をもつといえる。

さらに、両者は「「共通事項」はまた、複数の活動をつなぐものとして活用することにより題材同士の関連性を考慮した題材構成を実現することが可能となる。」¹⁰⁾としており、「共通事項」を指導事項に設定し、4つの活動を密接に関連させて授業を構成することへの有効性について言及している。

3 授業実践および指導案モデルの作成

(1) 附中における授業実践

併せて、筆者(多賀)は附中での授業実践をおこなった。本授業では、Ⅲの2で取り上げた、表現と鑑賞の指導事項の共通性(楽器の音色、曲想、奏法)を確認することに加え、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚させ、それらが生み出す特質や雰囲気を感じさせることを核とした授業展開を企図した(巻末資料1及び2)。生徒によるワークシートへの記入からは、表現要素を知覚し、それによって生み出される特質や雰囲気を感じている例が多く見られた。以下にその例を示す(表4)。



附中での実践授業の様子

表 4

生徒	記述した内容
生徒 A	流れるような感じではなく、軽やかな感じで、飛びはねるような演奏だった。元気なイメージになった。スタッカートがかかっていたから。
生徒 B	スタッカートがあって、明るく聞こえた。とぎれとぎれだったのでふいんきがかかった。
生徒 C	最初はつながっている感じでなめらかだったけど、3回目はほどよく切れててのびやかな感じ

これらの記入例を、知覚に関する記述と、感受に関する記述に整理したものが以下の表である(表5)。

表 5

生徒	知覚に関する記述	感受に関する記述
生徒 A	スタッカートがかかっていたから	軽やかな感じで飛びはねるような元気なイメージ
生徒 B	スタッカートがあってとぎれとぎれだったので	明るく聞こえた ふいんきがかかった
生徒 C	つながっているほどよく切れてて	なめらかだった のびやかな感じ

この記入例は一部であるが、知覚に関する記述からは、3種類の奏法(レガート、スタッカート、テヌート)による表現要素の変化を、生徒が知覚していることを読み取ることができる。また、感受に関する記述からは、表現要素の変化に伴って変化した、特質や雰囲気を感じていることが確認できる。

また、この生徒らが感想として記入したものが、以下の例である(表6)。

表 6

生徒	記述した内容
生徒 A	スラー、スタッカート、テヌートを意識して演奏するだけで、それぞれ、ぜんぜん違った感じの演奏になって、おどろきました。これから、なめらかに演奏したい時はスラー、短く切って弾むように演奏したいときはスタッカート、音の長さをしっかりと保って演奏したい時はテヌートを意識して演奏したいです。
生徒 B	1回目と3回目の聞き分けが難しかったです。スタッカートは知っていたけどスラーやテヌートはあまり聞いたことがなかったので覚えておきたいです。あまり聞かない楽器なので音は知っておけるといいです。
生徒 C	同じ曲でも1、2、3回とでは全ての歌(曲)の表情が違いました。今回は音だけだったので、これを機会に歌うときにも活かしていけるといいと思いました。記号の意味を知っていると、歌のイメージがつかみやすくていいな—と思いました！クラリネット、フルート、ピアノもきれいでした！

これらの記述からは、高月の示した指導事項の共通性のうち、曲想と奏法について確認することができる。しかし、音色に関する記述は少なく、他の生徒の感想にも音色に関する記述は多くは見られなかった。理由としては、筆者（多賀）が生徒に対し曲想や奏法にのみ着目させ、音色に着目するよう促さなかったことが考えられる。巻末資料1のとおり、本授業実践ではフルートとクラリネットを使用しており、普段聴き慣れない楽器の音色を知覚させる絶好の機会であったが、楽器の音色を表現と鑑賞の指導事項の共通性として確認ができなかったことは反省材料である。今後、研究を進める上での課題としたい。

（２）指導案モデルの作成

指導案モデルを作成するにあたり、これまでに確認した事柄と、明らかになっている課題を整理する（表7）。

表7

事 柄	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ・歌唱活動に対する関心が高い（特に混声合唱）。 ・記譜の能力が備わっている。 ・鑑賞を扱った授業実践によって知覚・感受の成立が確認でき、それを表現に生かす意欲が見られる。 ・先行研究における、表現と鑑賞の指導事項の共通性（曲想、奏法）が有効であることを確認した。 ・文献から、〔共通事項〕を土台とした領域横断型の授業展開の有効性に関する示唆が得られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は3学年間を通して、創作活動をするのが少ない。 ・表現と鑑賞はそれぞれ別の授業として設定され展開される傾向にある。 ・先行研究における、表現と鑑賞の指導事項の共通性の一部（楽器の音色）の有効性が確認できなかった。

ここで、領域横断型カリキュラム開発のもつ意義について確認しておきたい。

学習指導要領に、特定の分野に偏ることなく年間指導計画を立てたうえで授業を展開する必要があるとされていることは「1. はじめに」で述べた。そこで、音楽科の授業時間数の減少に伴って各活動を関連させた授業展開は困難になりつつあることから、領域横断型カリキュラム開発がより一層重要性を増すという研究仮説のもとに、研究を進めてきた。

併せて、平成19年6月の学校教育法の改正に伴って示された、学校教育で育成されるべき学力観に関しても検討する必要がある。この改正で示された学力観は、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲¹¹⁾の3つであり、音楽科にも授業を通してこれらの学力観を育成することが求められている。①が音楽科においては〔共通事項〕によって育成される「音楽活動の基礎的な能力」を意味していることはいままでのない。音楽科における知識・技能とは、音楽に関する用語や記号、発声法や楽器の奏法等を指すが、これらの音楽活動を通じた理解の必要については、学習指導要領解説中の「〔共通事項〕の新設」に示されているとおりである。同様に、②が示す

思考力・判断力・表現力等は、その「音楽活動の基礎的な能力」を活用し、生徒自らが設定した課題を解決する力であるといえる。そして、以上の課題設定と解決という活動の中で、③の学習意欲を育成することが望ましいと考える。

以上との内容と表5を踏まえ、本研究の目指す領域横断型カリキュラムは、「音楽活動の基礎的な能力を土台として、楽曲を表現するための方法を考え出す力」の育成を図るものとする。なお、指導案モデルの作成にあたって留意した点は以下の通りである。

- ① 各活動を〔共通事項〕によってつなぎ、それぞれにおいて音楽を形づくっている要素を知覚・感受するための学習活動を取り入れた。
- ② 授業時間数は設定していないが、概ね4～5時間での展開を想定している。
- ③ 指導案モデルの様式や評価計画は、国立教育研究政策所がweb上で公開している、「題材の評価に関する事例」を参考としている。
- ④ 指導案モデルという位置づけであるため、授業展開過程はフローチャートを用いて簡略化している。

音楽科学習指導案

1. 題 材 名 「表現と鑑賞による春の響き」

2. 指導内容

中学校学習指導要領（平成20年3月告示）

B鑑賞 - ア

- ・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

A表現（歌唱） - ア

- ・歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。

A表現（器楽） - ア

- ・曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること。

A表現（創作） - ア

- ・言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律を作ること。

〔共通事項〕 - ア

- ・音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受すること。

3. 対 象 中学校 第1学年

4. 教 材 A. ヴィヴァルディ：和声と創意の試み 第一集『四季』より「春」
第1楽章（以下、「春」） 鑑賞

宮城道雄：春の海 鑑賞

滝廉太郎：歌曲集『四季』より「花」（以下、「花」） 歌唱

創作過程における生徒の作品 器楽

5. 題材設定の理由

平成20年1月の中央教育審議会の答申を受け、文部科学省は同年3月に中学校学習指導要領の改訂を行った。内容の改善として示された8項目のうち、本案では「キ〔共通事項〕の新設」に着目し、立案を試みる。

本題材は、歌唱、器楽、創作からなる「表現」と「鑑賞」の各活動を往還的に関連させる授業展開を企図して設定したものである。また、春を題材に据えることで、生徒が新鮮な気持ちで授業に臨むことが期待できる。まず、ヴィヴァルディの「春」と宮城道雄の「春の海」を比較聴取させ、音楽を形づくっている要素を知覚・感受させる。第二に、鑑賞による知覚・感受を土台とし、滝廉太郎の「花」を教材として歌唱活動をおこなう。第三に、「花」の一部をモチーフとして簡単なアンサンブル曲を創作し、器楽活動として作品をグループで演奏する。さらに、その演奏を鑑賞したうえで印象を言語化し、そのよさを吟味できるようにする。

これらの活動を関連させるのが前述の〔共通事項〕であり、教材に共通したテーマである「春」について、音楽を形づくっている要素を知覚・感受させて表現や鑑賞に生かすことで、題材に対する生徒のより深い理解と感受を実現させることができると考え、本題材を設定した。

6. 題材の目標

- (1) 楽曲の特徴に関心をもち、それらを生かして意欲的に表現し鑑賞している。
→音楽に対する関心・意欲・態度
- (2) 楽曲の特徴を知覚・感受し、それらを表現に生かす工夫をする。
→音楽的な感受や表現の工夫
- (3) 楽曲の特徴を生かして、表現する技能を身につける。
→表現の技能
- (4) 楽曲の特徴を理解して全体を聴き、その味わいを人に伝えることができる。
→鑑賞の能力

7. 学習計画

次	活 動
第一次	①春から連想することをワークシートに記入し、発表する。 ②「春」の第1楽章と「春の海」を、楽器の音色、曲想、奏法に着目して鑑賞する。 ③それぞれの共通点、相違点を、知覚・感受した内容と関連させてワークシートに記入する。

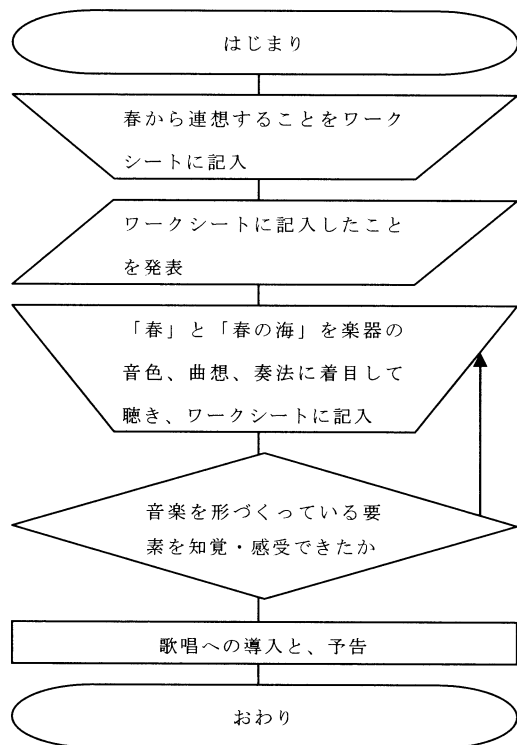
第二次	①「花」の範唱を聴く。 ②前次のワークシートを参考にグループで話し合い、「花」をどのように表現するか考える。 ③グループごとに演奏発表する。
第三次	①グループごとに、「花」のなかで気に入った1小節を選び、創作のためのモチーフとする。 ②楽器を選び、モチーフをもとに簡単なアンサンブルを創作する。
第四次	①グループごとに演奏発表する。 ②聴く側の生徒は、ワークシートに記入しながら鑑賞し、感想とともに各グループの特徴を見つけて記入するようにする。

8. 評価計画

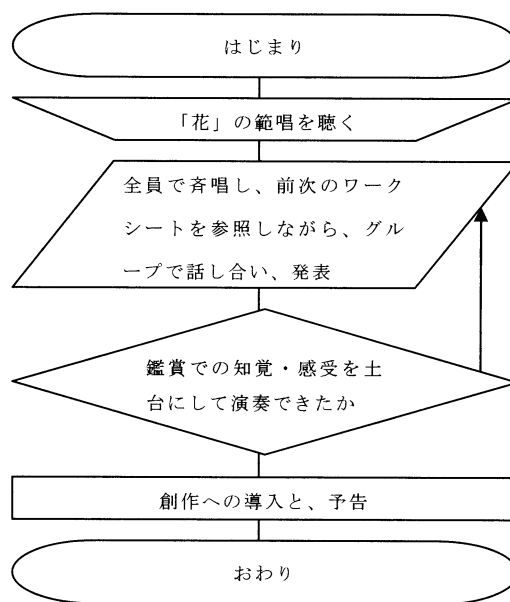
観点	題材の評価規準
観点1 音楽への関心・意欲・態度	楽曲の特徴に関心をもち、それらを生かして意欲的に表現し鑑賞している。
観点2 音楽的な感受と表現の工夫	楽曲の特徴を知覚・感受し、それらを表現に生かす工夫をしている。
観点3 表現の技能	楽曲の特徴を生かして、表現する技能を身につけている。
観点4 鑑賞の能力	楽曲の特徴を理解して全体を聴き、その味わいを人に伝える能力を身につけている。

9. 授業展開過程

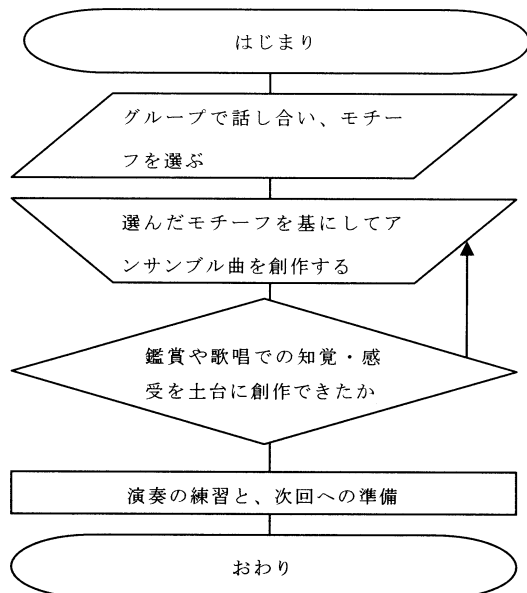
第一次



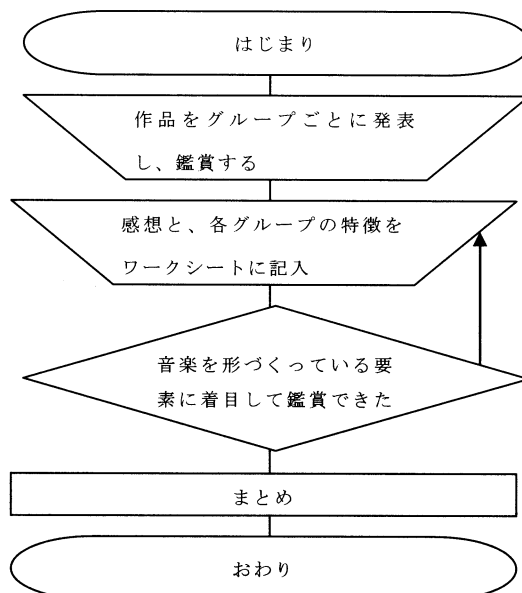
第二次



第三次



第四次



(3) 教材選択の指針

指導案モデルの作成に際して、以下の3点を教材選択の指針とした。

- ① 指導事項の共通性（楽器の音色、曲想、奏法）を聴き取りやすく、これらを表現しやすい楽曲を選択すること。
- ② 共通のテーマをもつ複数の楽曲を選択すること。
- ③ 異なる演奏形態をもつ複数の楽曲を選択すること。

①に関しては高月の先行研究を踏まえたものであるが、授業実践においては楽器の音色を知覚させることに課題を残した。このことから、演奏や創作の表現活動によってこの課題を補完させる意図のもとに、表現のしやすさを指針に含めた。②と③は互いに関連しており、共通のテーマのもちながらも、異なる演奏形態をもつ楽曲を選択することで、相互比較の観点を導入しやすくさせ、音楽を形づくっている要素の多様性に気づかせることができると考え設定した。

(4) 教材選択のうえでの課題

以上の3点を踏まえて指導案モデルの教材を選択したが、これらの曲には西洋音楽の要素が多く¹²⁾、多様な音楽を味わわせるという観点からは、提供した音素材が限定的であると言わざるを得ない。歌唱教材に関しては学習指導要領に示された共通教材から選択したが、鑑賞教材に関しては、学習指導要領に「我が国や郷土の伝統的な音楽を含む我が国及び諸外国の音楽の様々なうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う」と示されており、このことを考慮した指針作りが今後の課題である。

IV 今後の課題

本研究では指導案モデルを作成し、教材選択の指針とその課題を明らかにした。しかし、生徒に対する評価の手段や評価規準等については、本研究では検討をおこなっていない。学校教育における生徒への指導と評価は表裏一体の関係にあり、カリキュラム開発や年間指導計画等を作成するにあたって重要な項目である。よって、先述の課題に加え観点別学習状況の評価や評価規準の作成等に主眼をおいた研究の継続を課題としたい。

付 記

本稿は2009年3月16日から18日にかけておこなわれた、大学院教育学研究科の『『実践研究』成果発表会』において配布した資料を加筆・修正し再編したものである。また、附属中学校の実習では、担当教員である小村聡先生にご多忙の中、丁寧にご指導いただいた。ここにお礼申し上げます。

巻末資料1 授業実践における学習指導案

音楽科学習指導案

授業者 多賀 秀紀(T1)
 小川 夢由子(T2)
 田中 沙織(材料)
指導教員 小村 聡 先生

1. 題材 「表現要素に着目した鑑賞」

2. 指導内容
 中学校学習指導要領(平成20年3月公示)
 Ⅱ「鑑賞」
 ・音楽を聴くことに関する発想と表現のつながりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。
 Ⅲ「作曲体験」
 ・音色、リズム、拍子、旋律、ダンスなど、発想、表現などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知るとともに、それらがもたらす印象や感情を体験すること。
主たる指導内容 ●音楽の要素(表現要素)の働きと効果
副次的な指導内容 ●音楽要素(フォルム、クラリネット)の名称、音色

3. 対象 第1学年1組4授業時(20分間)

4. 教材 「日本の四季」メドレーより「夏の思い出」(三重奏に編曲されたもの)

5. 題材設定の理由
 本題材は、大学院教育研究科における教育実習(教科内容領域実践研究)の、授業実践の一環として設定し、行われたものである。
 平成20年3月に公示された中学校学習指導要領(以下、新学習指導要領)において、音楽科には「共通事項」が掲載され、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取ること、音楽に関する用語や記号などについて音楽活動を通して理解することが新たに示された。さらに、この「共通事項」は、表現及び鑑賞に関する能力を育成する上で共通に必要なものであり、表現及び鑑賞の各活動において十分な指導が必要であると示されている。このことは、領域相互の関連を探ることが必要であるとして、現行学習指導要領の趣旨を踏襲したものであり、領域横断型の授業計画を作成する上で、検討すべき重要な内容であると考えられる。また、新学習指導要領は平成21年度より先行実施が可能であるため、新学習指導要領に基づく学習指導案を作成し実践することは、「新学習指導要領に沿った授業計画の立案も含めて検討する」とした本研究の目的及び計画に合致する。
 本時は、「夏の思い出」を歌唱教材ではなく、鑑賞教材として用いる。生徒は、「夏の思い出」を以前に学習しており、楽曲についてはある程度のイメージがあると考えられる。このことから、授業者

2009年2月1日(水) 4/23(水)
 教育実習資料 教科内容領域実践研究

が表現要素を変化させたがら楽曲を演奏することで、生徒は表現要素やその変化を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感得しやいと考えられる。さらに、この学習を通して、生徒が他の楽曲も学習し表現する際に、そのための方法を考えることができるようになることをねらいとして、本題材を設定した。

6. 題材の目標
 (1) 「夏の思い出」の演奏による表現要素やその変化を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感得する。

7. 学習計画

次	学習活動
第1次	① 「夏の思い出」(三重奏版)を聴く ② 表現要素を変化させた「夏の思い出」を聞く ③ 最初の演奏との相違点と、どのように感じられたかをワークシートに記入する。

8. 学習展開過程

時	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価の位置
1	授業実践の名称 音楽要素の音色	・「夏の思い出」を聴く ・説明による「夏の思い出」とのよさや違うところを挙げる。 ・表現要素を変化させた「夏の思い出」を聴く。 ・感想を交換する。 ・さらに表現要素を変化させた「夏の思い出」を聴く。 ・感想を交換する。	・別1旋律を演奏し、生徒に手拍子や、楽器の名称を答えさせる。また、どのような音色であったかを問いつける。 ・9月に学習した鑑賞のよさや、歌詞を思い出しながら聞くように促す。授業者(演奏者は、メロディで演奏する。 ・生徒に手拍子、あるいは授業者から指差し感得を促させる。 ・授業者は、大きなスクリーンで演奏する。 ・生徒に手拍子、あるいは授業者から指差し感得を促させる。 ・授業者は、大きなスクリーンで演奏する。	

- 2 -

2009年2月1日(水) 4/23(水)
 教育実習資料 教科内容領域実践研究

・ワークシートに記入する。	・それぞれの演奏の感想をワークシートに記入させる。その際、「なんとも違う」といふことで、「何がどのように違うのか」についても併せて記入させる。
・3つの初めの違いについて学習する。	・あらかじめ用意しておいた、「スラー」、「スタッカート」、「アクセント」について説明したものを、ホワイトボードに掲げ、併せてワークシートの空欄を埋める。
・表現要素を変化させることで、異なる表現の可能性が広がることを知る。	・「夏の思い出」に限らず、他の楽曲を演奏する際にも、「スラー」、「スタッカート」、「アクセント」などを用いることで、異なる表現の可能性が広がることを伝える。

- 3 -

巻末資料2 授業実践におけるワークシート

「夏の思い出」を鑑賞してみよう!

名 姓 ()

1. 今日聴いた楽器の名称

()

金属で出来ている木管楽器

()

黒い縦長の楽器

2. 最初の演奏と二回目の演奏を比べて

違いをどのように感じたか書いてみよう。また、何が理由でそのように感じたかも書こう。

[]

3. 最初の演奏と三回目の演奏を比べて

違いをどのように感じたか書いてみよう。また、何が理由でそのように感じたかも書こう。

[]

4. タネ明かし…

最初の演奏では [] (レガート)が用いられていた。
⇒違う高さの二つ以上の音をなめらかに演奏すること。

二回目の演奏では []が用いられていた。
⇒短く切って、弾むように演奏すること。

三回目の演奏では []が用いられていた。
⇒音の長さを十分に保って演奏すること。でも、スラーとはちょっと違う…

**これを知っていれば、歌を歌うときに、
今までよりさらに表情豊かに歌うことが出来るかも!?**

〈参考文献 参考web資料〉

- ・小野衛 1987 『宮城道雄の音楽』 東京：音楽之友社
- ・加藤富美子 1997 『横断的・総合的学習にチャレンジ』 東京：音楽之友社
- ・高月道代 2007 「中学校音楽科において表現と鑑賞の関連を図った教材開発—アジアの音楽—」
日本学校音楽教育実践学会 『学校音楽教育研究』第6巻：p. 88-p. 89
- ・西園芳信 2003 『中学校音楽の指導と評価』 東京：暁教育図書
- ・西園芳信、伊野義博 2008 『平成20年度改訂 中学校教育課程講座 音楽』 東京：ぎょうせい
- ・文部科学省 2008 『中学校学習指導要領』 京都：東山書房
- ・文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 東京：教育芸術社
- ・2006 『中学生の音楽 1』 東京：教育芸術社
- ・2006 『中学生の音楽 2・3下』 東京：教育芸術社
- ・国立教育研究所ホームページ <http://www.nier.go.jp/kaihatsu/houkoku/stongaku.pdf>
- ・文部科学省ホームページ <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22HO026.html>

〈注および引用文献〉

- 1) 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領』 京都：東山書房 p.77
- 2) 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 東京：教育芸術社 p.56
- 3) 同上書 同頁
- 4) 「法教育、環境教育など教科内に」 『教育新聞』 2005年9月22日 第1面
- 5) 他教科と領域横断型の授業展開については、岡田（2004）が美術と音楽を関連させた研究をおこなっている。また、総合的な学習と音楽を関連させる試みも多く、加藤による著書（1997）などがある。
- 6) 入手した年間指導計画の指導内容にかかわる項目について分析をおこなった。年間指導計画には、附中の音楽科が扱う題材に対して、新学習指導要領に示された指導事項のいずれの項目が該当するかが「◎」と「○」で示してある。ここでは、「◎」を主たる指導内容とし「○」を副次的な指導内容として区別した。
- 7) 高月道代 2007 「中学校音楽科において表現と鑑賞の関連を図った教材開発—アジアの音楽—」 日本学校音楽教育実践学会 『学校音楽教育研究』第6巻：p.89
- 8) 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編』 東京：教育芸術社 p.6
- 9) 西園芳信、伊野義博 2008 『平成20年度改訂 中学校教育課程講座 音楽』 東京：ぎょうせい p.97
- 10) 同上書 p.100
- 11) 同上書 p.4
- 12) 「春の海」に関しては日本の伝統音楽とは言い難い側面もある。小野（1987）は、宮城道雄にとって「春の海」を作曲した時期は、「古典箏曲の作曲法と西洋音楽の技法とがしだいにこん然一体となってゆき、そしてそれを使いこなしていく時期である。」と述べている。